

令和七年度入学者選抜学力検査本試験問題

国語

配点

1	32点
2	39点
3	29点

注意事項

- 問題冊子は指示があるまで開かないこと。
- 問題はページから十八ページまでである。検査開始の合図のあとで確かめること。
- 検査中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、静かに手を高く挙げて監督者に知らせること。
- 解答用紙に氏名と受験番号を記入し、受験番号と一致したマーク部分を塗りつぶすこと。
- 解答には、必ずHBの黒鉛筆を使用すること。なお、解答用紙に必要事項が正しく記入されていない場合、または解答用紙に記載してある「マーク部分塗りつぶしの見本」のとおりマーク部分が塗りつぶされていない場合は、解答が無効になることがある。
- 一つの解答欄に対して複数のマーク部分を塗りつぶしている場合、または指定された解答欄以外のマーク部分を塗りつぶしている場合は、有効な解答にはならない。
- 解答を訂正するときは、きれいに消して、消しくずを残さないこと。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

(注1) せいしやうなげん (注2) まくらのそし (注3) かもちやうめい

清少納言の『枕草子』、鴨長明の『方丈記』と並んで三大随筆の一つと称される『徒然草』ですが、あえて単なるエッセーではなく、思想書としてとらえて考察していきたいと思えます。

全体としてみると、二四〇余りの短章から成っているうえに、それが心のままに書き足されていったということもあって、統一感があるようでないものになっています。それはそのまま思想の多面性という結果を生んでいます。

しかし、もしそこに何か一カンしたコンセプトのようなものがあるとするならば、やはりそれは無常観ということになるのでしょう。「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものか(花は満開の時ばかり、月は満月ばかりを見るものか。いや、そうではない。)」という有名な表現がありますが、まさにここに表現されているのが無常観です。兼好は、満開の花や満月にではなく、むしろ移ろいゆく自然の姿にこそ無常の美を見ていたのです。そして「世はさだめなきこそいみじけれ」というふうには、人生もまた無常であるからいいのだと考えていたのです。

それが一番明確に示されているのは、第二〇八段の次の一節ではないでしょうか。「刹那覚えずといへども、これを運びて止まざれば、命を終る期、忽ちに至る。されば、道人は、遠く日月を惜しむべからず」。つまり、ほんの短い時間といえども、これをただ漫然と過ごしてしまえば、たちまち死がやってくる。だからこそ、仏道の修行者は、遠い先の時間のことを考えていてはいけません。今の一瞬一瞬を空しく過ごさないようにしなくてはならないということです。

たしかに人生は一瞬一瞬移り変わっていく無常なものです。そうすると、私たちの生涯はそれら一瞬一瞬の積み重ねだということになります。でも、普段はそのことに気づかないので、まるで長い時間があるかのように感じてしまうのです。だから一瞬一瞬を大事にしようとはしません。そうして気づけば死を迎えることになるのです。

(1) 兼好は、それではいけないと考えているわけです。それゆえ一瞬一瞬を空しく過ごしてはいけないと戒めるのです。逆に考えると、私たちは一瞬一瞬異なる人生を楽しむことができるものととらえられるのではないのでしょうか。もしそうとらえることができれば、人生は無常だからこそのいいという結論になるはず。これこそ「さだめなきこそいみじけれ」が意味するところにほかなりません。

そうすると、当然無駄なことに時間を費やしたり、気を取られてばかりいるのはもったいない限りです。兼好は第一一二段でそのことをきっぱりと断言してくれています。これは私の一番好きな箇所でもあります。

人間の儀式、いづれの事か去り難からぬ。世俗の黙しがたきに随ひて、これを必ずとせば、願ひも多く、身も苦しく、心の暇もなく、一生は雑事の小節にさへられて、むなしく暮れなん。日暮れ塗遠し。吾が生既に蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ。礼

義をも思はじ。この心をも得ざらん人は、物狂ひとも言へ、うつつなし情なしとも思へ。毀るとも苦しまじ。誉むとも聞き入れじ。

つまり、世俗のしきたりは、どれもなくしくいものばかりだということです。無視できない世俗の習慣に従って、これを必ずやらねばならないと考えると、願ひも多く、身も苦しく、心に暇もなく、一生はこまごました雑事の小さな義理立てにさえぎられ、空しく暮れてしまうでしょう。

その結果、日は暮れたけれど、いまだに道は遠い。自分の人生はすでに行き詰まったなどということになりかねません。だから、あらゆる縁を捨て去るべきだということです。信用など守らなくていい。礼儀も思わなくていい。この気持ちを理解できない人は、物狂いだといったければいい。正しい、正気を失っているとも、人情に欠けるとも思うがいい。人が文句をいったって、苦しむまい。誉めても聞き入れまい。

兼好はこのように割り切ります。世俗の空しさを知り、逆に出家して無常を生きるこの大切さを日々実感していた兼好だからこそいえることです。世俗にしがみついている私などは、思つてはいてもなかなかこんなことを口にする勇氣がありません。(2)年賀状を止める宣言をするのが関の山です。だからこそ『徒然草』に惹かれるのです。

兼好の無常観は、こうした生き方や日常の実践に結び付けられるところに意義があるように思えます。いわば実践的無常観です。『徒然草』は兼好が思いついたことだけでなく、彼の生き方の実践の記録でもあるのです。少なくとも私はそのように読むのがいいと思つています。

おそらくこの兼好の思想の実践性は、禅から来ているのではないのでしょうか。現に、道元の曹洞宗や栄西の臨済宗からの影響を指摘する研究は色々あります。たとえば臨済宗では、無事の思想が説かれます。これは、平常無事で、他に何物も求めることをしないという状態です。そんな境地を知る者が知者であるとされるのです。

兼好は、無事という言葉こそ使わないものの、(3)これに似た状態が一番よいとしています。第一七五段にある「人事多かる中に、道を楽しぶより気味深きはなし」がそれにあたります。つまり、人間がする事はたくさんあるが、人として最大の良きことは純粹に仏道に励むことだという意味です。兼好の無常を常とする生き方は禅の修行にも似ており、その言葉は時に禅問答のように響くことがあります。

ここまで兼好の無常観を強調してきましたが、実は『徒然草』の魅力はそれにとどまるものではありません。たとえば、人間や社会に対する鋭い洞察もこの作品の特徴の一つです。油断を戒めた、高名の本登りの有名な一節からもわかるように、兼好は実に仔細に人間を洞察し、現代にまで通じるウイットに富んだ箴言を残しています。だからこそ学校教育においても必須の古典になっているのでしょう。

さらに、兼好は歌人であったこともあり、文章表現も美しく、『徒然草』からはまるで延々と続く歌を聞いているかのような心地よいリズムを感じます。古典の時間に暗唱させられても、なぜか歌を覚えるようでワクワクしたことを記憶しています。古典の暗唱で私がそんなふう

感じたのは、実際に歌として伝わった『平家物語』のほかにはこの『徒然草』だけです。

実践的無常観、ウィットに富んだ箴言、心地よいリズム。この三つが『徒然草』のコン幹です。③そう考えると、思想書『徒然草』はなんとなくドイツの哲学者ニーチェの著作に似ているような気がします。『ツァラトゥストラはこう言った』などで有名な哲学者です。ニーチェの場合、いかに生きるかという答えとして、超人の概念を提起しました。虚無を乗り越えて強く生きる人間像です。もしかしたら、兼好の説く生き方は、日本版超人なのかもしれません。④無常を受け止めて強く生きよと、私たちを鼓舞し続けてきたのですから。それが色濃く表れているのが、第三八段の次の一節です。

本より、賢愚・得失の境にをらざればなり。迷ひの心をもちて名利の要を求むるに、かくの如し。万事は皆非なり。言ふに足らず、願ふに足らず。

知があるだとかないだとか、どっちが賢いとか愚かだとか、そのようなことをいう時点でもうすでに間違っているということです。なぜなら、もともと真の賢者は、賢いとか愚かだとか、あるいは損得を区別して満足するような相対的な境地にはいないからです。そして、迷いの心を持つて名誉や金銭を欲すると、あらゆることが愚かな結末を迎えてしまうと指摘します。名誉・金銭にかかわる世俗の万事は、すべて否定されるべきことなのです。だからそんなことを語っても仕方ないし、願っても仕方ないというわけです。

本当の知者は、知を比較可能な相対的なものとしてとらえないというのは、とても力強い発想です。これぞ無常を受け止めるということの真の意義ではないでしょうか。一瞬一瞬を強く生きる人間にとって、そのような他者との比較は無意味なのです。自分にとって意味があるのは、今を懸命に生きることだけ。

徒然なるままに生きるといえるのは、本当はそういうことなのだと思います。ただ漫然と生きている人間が、冒頭で「あやしうこそものぐるほしけれ」などとは宣言しないでしよう。兼好は、異常なほどとりつかれていたので、人生という激しい営みに。

(小川仁志『日本の思想家入門「揺れる世界」を哲学するための羅針盤』KADOKAWA による)

(注1) 清少納言Ⅱ平安中期の歌人・随筆作者。

(注3) 漫然Ⅱ特別の目的もなく事をなすさま。

(注6) ウィットに富(む)Ⅱ気のきいたことを機転をきかせて言うさま。

(注2) 鴨長明Ⅱ鎌倉初期の歌人・随筆作者。

(注4) 道元Ⅱ鎌倉初期の禅僧。

(注7) 箴言Ⅱ教訓の意味を持った短い言葉。

問1 本文中の、①一カン、②ビ細、③コン幹、④ケン命 のカタカナ部分の漢字表記として適当なものを、次のアからエの中からそれぞれ一つずつ選べ。

①一カン ア 卷 イ 間 ウ 環 エ 貫
②ビ細 ア 微 イ 備 ウ 尾 エ 美

③コン幹 ア 魂 イ 困 ウ 混 エ 根
④ケン命 ア 憲 イ 懸 ウ 険 エ 賢

問2 本文中の、空しく、感じ、とらえ、費やしの中で、他と活用形が異なるものを一つ選べ。

a 空しく過ごさない b 感じて c とらえられる d 費やしたり

問3 本文中に、兼好は、それではいけないと考えているわけです。とあるが、兼好はどのような状態を「いけない」と考えているか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 一瞬一瞬が移り変わっていくものであるということと意識することなく、過ぎ去っていく時を無駄に過ごしている状態。

イ 一瞬一瞬の積み重ねによって人生という長い時間が形作られていることに疑いを持ち、いらだちながら生きている状態。

ウ 一瞬一瞬が移ろっていくその日々の中に最高の美を見出しつつ、自分の生活を常に華やかに飾りながら生きている状態。

エ 一瞬一瞬の中にある空しさに目をとめることなく、死を迎えるための大切な準備をせずにぼんやりと過ごしている状態。

問4 本文中に、年賀状を止める宣言をするのが関の山です。とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 世間との関わりを絶って生きていくことに、兼好は肯定的であるが、筆者は年賀状を止める以上の何かをすることで世間との関係を絶つても意味がないと思っているということ。

イ 世間の習慣を無駄だと考え、それを実践して生きた兼好と違い、筆者にとっては年賀状を止めることが精いっぱい、それ以上世間のしきたりや無視するのは難しいということ。

ウ 世間の人々と対立したため、習慣に縛られた生活から離れた兼好に、筆者は強くあこがれているが、年賀状を止めて世間から隔絶されることには恐怖心を持っているということ。

エ 世間の目を気にするより大切なことがあるという兼好と違い、筆者は世間との関わりを大切にしているが、年賀状などの伝統的な習慣を減らすことには賛同しているということ。

問5 本文中に、これに似た状態が一番よいとあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 純粹に仏道に励んでいる状態が、する事の多さによるわずらわしさを解消し、目標に向かって進むための唯一の方法であるから。

イ 自分の思想を生活の中で実践している状態が、世俗に縛られた不自由な生き方を避けるためには必要不可欠なものであるから。

ウ 仏道修行に没頭している状態が、何かを求めることなく生きていくことこそ大切だという考えに非常に近く、望ましい境地であるから。

エ 何物も求めることをしないという状態が、日々の生活にこだわらずに自分の理想を実現していくという禅の思想に近いものであるから。

問6 本文中に、無常を受け止めて強く生きよとあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 人生は人それぞれであり他者との比較は無意味だが、それでも誰かとの比較で自分の価値が決められてしまうという事実を受け止めるのが重要であるということ。

イ 人生を歩んでいくうえで、自分と他者を比較することは無意味であり、常に変わり続けるその時その時を大切にしながら生きていくことが重要であるということ。

ウ 他者からの評価は生きていくために必要ではあるが、それを得るためには、むしろ自分と他者を比較せず自分らしく生きていくことの方が重要であるということ。

エ 他者と比較してしまいう自分の弱さを認めつつ、この世には変わらないものはないという真実のみを心のよりどころとして生きていくことが重要であるということ。

問7 本文中に、あえて単なるエッセーではなく、思想書としてとらえてとあるが、筆者が『徒然草』をそうとらえるのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 人生という非常に大きなテーマについて、機転をきかせた内容を、兼好特有の心地よいリズムで記したものであるから。

イ 無常という新たな考え方を人々に伝えるだけでなく、兼好が当時の世間の常識を変えようとして述べたものであるから。

ウ 日本古来の禅という思想が、兼好の視点でとらえ直した形で表現されており、日本人にとってなじみやすいものであるから。

エ 兼好の心に浮かんだことを書いていただけでなく、自身の思想を生活に生かそうとする態度に基づき書かれたものであるから。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

インターネットがうわさの巣窟と批判されるのは、事実かどうか定かではない情報や虚偽の情報が流布しやすいと考えられているためである。マスメディアとは異なり、インターネット上では、誰もが容易に不特定多数に向けて情報発信できる。かつ、相手に自分の姿をさらすことなく、匿名のままで発信できるため、真偽を十分確かめず無責任に発信する人や意図的に虚偽の情報を発信する人がいると考えられているのだ。この「相手に自分の姿をさらすことなく、匿名のままで発信できる」というインターネットのメディア特性は混同されがちな二点——身体性の欠如と匿名性からなっている。

まず、身体性の欠如であるが、これはさらに、表情や身振りなどの言語的なメッセージに付随する非言語的な手がかりが欠如すること、身体そのものの欠如という相互に関連する二つに分けて理解する必要がある。

直接会って話をする場合、話の内容だけでなく、相手の様子や表情、声の抑揚や動作（手振り・身振り）などもメッセージとなる。「元氣だよ」という相手の表情が優れない場合、「元氣だよ」という言葉を額面通りには受け取らず、「具合が悪いのはなぜか」「何があったのか」「調子が悪いことをなぜ隠そうとするのか」などと考える。このような非言語的な手がかりは意図的に発せられる場合も意図せず発せられる場合もあるが、言語的なコミュニケーションが主流なインターネット上のやりとりには欠けている。それを補うために、顔文字が使われたり、表記方法が工夫されたりするが、インターネット上のコミュニケーションで誤解が生じる原因として、しばしばコミュニケーション・キュー（手がかり）の少なさが挙げられている。

ただし、同じ場に居合わせることで持つ意味はそれだけではない。恋人同士や家族と一緒に過ごす場合、お互いの身体がそこに存在すること自体が特別な意味を持つのであって、そこで交わされる会話自体はたいしたことなくても、ことによると会話が何もなくともかまわない。電話の場合、相手は目の前にはいないが、時間を共有している。ゆえに、黙る、つまり声の不在が意味を持つ。しかし、時空間を共有しないインターネット上のコミュニケーションでは、相手の物理的な存在を感じにくい。

インターネット上では見知らぬ相手とやりとりすることができる。では、日常生活において私たちは見知らぬ相手とどのように接しているのか。たとえば、電車でたまたま一緒にいた人と会話することは通常ないが、相手の存在自体を感じていないわけではない。相手の存在は十分認識した上で、あからさまにじろじろ見たりはせず、注意深く「相手に特別な関心を持っていない」という振る舞いをするのである。「車内での読書」もそのための小道具として用いられている。社会学者のアーヴィング・ゴフマンはこのような行動を「儀礼的無関心（civil inattention）」と名づけているが、私たちは他人と時空間を共有する場合、他人と他人のままでいるための行動をとっているのであり、違反した行動をとる

と、たとえば、あからさまに見知らぬ人を見つめると、話しかけられたり、場合によってはけんかになったりする。**a**、あなたと関わり合

いにならないように、相手はその場から逃げ出すかもしれない。

インターネット上でしばしばフレーミング(炎上)が発生するのは、コミュニケーション・キューの少なさによる誤解や匿名性がもたらす無責任な発言だけでなく、身体性の欠如も原因の一つである。目の前に相手がいるならば、言えないようなことを、まさに目の前にいないからこそインターネット上には書き込めてしまう。何を書いても殴られる心配はないのだから。

この身体性の欠如は匿名性の問題につながる。

匿名性とは都市社会における関係性の特徴を捉えるために用いられてきた言葉であり、文字通り「名前」だけでなく、個人が特定されないこと、具体的には年齢や性別、人種、社会的地位、職業など、その人が社会的に何者であるかがわからないことを指す。

私たちは親しい相手のことは名前だけでなく、その人が何者であるかよく知っている。

匿名性も知らず、知らないままやり過ぎす。先に紹介した儀礼的無関心は匿名の関係性のままで同じ空間を共有するための作法であるのだ。ただし、お互い名前も知らず、何者であるかわからないが、顔や姿が見えていることから、推測できる部分がある。筆者を知らなくても街中で見かければ、中年女性だと「わかる」わけだし、子どもと一緒にいれば母親とみなされる。その意味では都市空間における匿名性は不完全である。

かつて心理学者のスタンレー・ミルグラムは、電車のなかでよく見かけるため、顔はよく知っているが言葉を交わしたことの無いような他人を「ファミリア・ストレンジャー (familiar stranger)」と名づけたが、このような親密性と匿名性の中間的関係性も都市化が進むなかで広がってきた。しかし、時空間を共有しないインターネット上で成立する匿名性は、これらとは別ものとして考えるべきである。

インターネットが普及し始めた一九九〇年代半ば、インターネットに期待する言説の一つに、社会的属性にとらわれない平等なコミュニケーションが可能となるというものがあつた。

都市の匿名性では社会的属性が「見えてしまう」が、インターネット上では顔や姿は見え、推測もできない。このため、重要になるのは、「誰が言ったか」ではなく、「何を言ったか」となる。インターネット上では、著名な政治家の発言であっても無名の子どもの発言であつても、同じようにその中身だけで評価されるようになると期待されたのである。ただし、その一方で、匿名性の持つ負の側面——誰であるかが知られないために無責任な行動をとる可能性が増大しかねないことも、当初から懸念されてきた。

以上のことを図示したのが、左の図1である。メディアを使うことなく、あるいは、個人の身体のみがメディアであるのが、【B】にあたる。これまで、うわさとは基本的にこの領域に属するものとして扱われてきた。

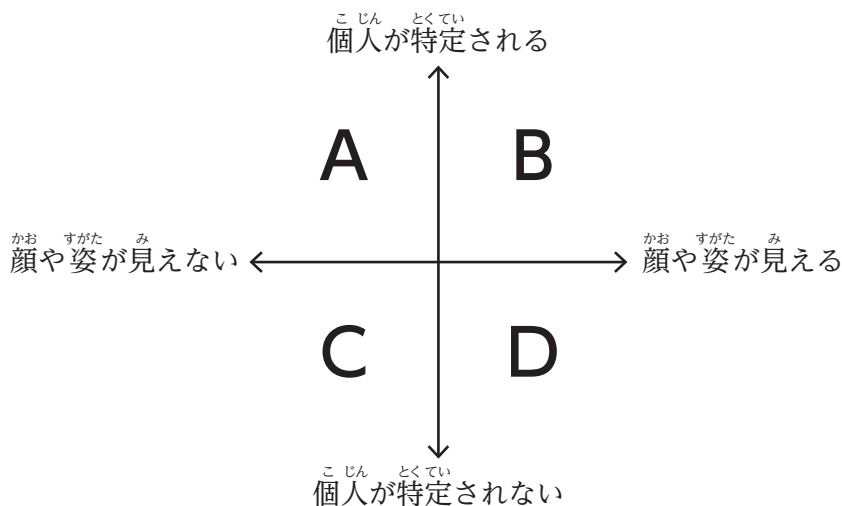


図1 匿名性の観点からみたメディア・コミュニケーションの分類

都市化にともない、「①」の関係性が拡大する。時空間は共有するものの、お互い相手が誰でもあるかはわからない関係で、決まった通勤電車で乗り合わせる人たち、コンビニエンスストアの店員と客の関係などがこれにあたる。通常、会話はなされることはないか、あるいは、店員と客のやりとりのような決まった範囲の会話しか交わされないが、何かが起こった場合には話が始まることもある。

「C」、電車が急に停車し、しばらく動かなくなったとき、その原因をめぐって隣にいる人と話を始める。非常時のうわさはこのような関係性のなかで生まれる場合も少なくない。非常時にうわさが多く生まれ、通常より素早く広範囲に広まるのは、非常時であるがゆえに普段なら会話しない者同士が会話するためでもある。

手紙や電話、メールやSNS（ソーシャル・ネットワーク・サイト）のような離れたところにいる特定の相手とのやりとりが含まれるのが「②」であり、匿名の関係性のまま、時空間を共有することがないインターネット上でのやりとりが「③」に入る。もちろん、インターネット上でのコミュニケーションは多様であって、チャット機能を使えば、時間を共有したコミュニケーションが可能であるし、カメラ機能を使えば、お互いに顔や姿を見ながらやりとりすることができる。将来的には「④」にあてはまるようなインターネット・コミュニケーションが中心となるかもしれないが、現状では身体性の欠如と匿名性を軸に整理したこの枠組みが有効であると考ええる。

（松田美佐『うわさとは何か ネットで変容する「最も古いメディア」 中央公論新社 による）

（注1）巣窟＝好ましくないものが集まっているところ。

（注2）流布＝世間に広まること。

問1 本文中の、(a) 額面通りに、(b) 懸念の意味として適当なものを、それぞれ次のアからエまでのの中から一つ選べ。

- (a) ア 損得抜き (a) の気持ちとして イ 表現された内容のままに ウ 型にはまった言い方として エ 表面的な振る舞いのままに
- (b) ア 仮説を立てて検証する イ 何度も繰り返し指摘する ウ 自由気ままに言い合う エ 気にかかって心配に思う

問2 空欄 a、b、c に入る語として適当なものを、次のアからエまでのの中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じ記号は二回使わない。

- ア あるいは イ つまり ウ たとえば エ しかし

問3 本文中に、(1) 声の不在が意味を持つ。とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

- ア 電話においては、知っている相手と話すため、沈黙したとしてもお互いの気持ちを通じ合うということ。
- イ 電話においては、時間を共有しているため、沈黙したとしてもお互いの存在を感じているということ。

ウ 電話においては、空間が隔たっているため、黙っていてもお互いに気を使う必要がないということ。

エ 電話においては、相手が目の前にいないため、黙っていてもお互いに心配しないですむということ。

問4 本文中に、「儀礼的無関心 (civil inattention)」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

- ア 相手の存在を感じつつ、あえて注意を向けず、相手に対して関心を抱いていないことを示す行為。
- イ 他人の存在を認めながら、意図的に相手を無視することで、危害を加えてほしくないということを示す行為。

ウ 他人の存在を意識し、読書に没頭しているふりをするので、会話を拒んでいるということを示す行為。

エ 相手の存在を知覚した上で、じろじろ見ることはしなくとも、警戒心を維持しているということを示す行為。

問5 本文中に、(3) 社会的属性にとらわれない平等なコミュニケーションが可能となる とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 時空間を共有しないインターネット上では、時間や場所の制約を受けず発信できるため。

イ 都市社会における関係とは異なり、親密性を保ったまま発言することが許されるため。

ウ インターネット上では匿名性が保たれており、不特定多数に意見を発信できるため。

エ どのような人が言ったことであっても、発言の内容だけが評価されるようになるため。

問6 本文と図1を照らし合わせて、「①」「②」「③」「④」に入る適当な記号を、AからDまでの中からそれぞれ一つずつ選べ。

ただし、同じ記号は二回使わない。

問7 本文中の、インターネットのメディア特性 について、筆者はどう述べているか。その説明として最も適当なものを、次のAからEまでの中から一つ選べ。

A インターネット上でしばしばフレーミングが発生するのは、コミュニケーション・キューの少なさによる誤解や匿名性がもたらす無責任な発言ということに主な原因があり、身体性の欠如とはまったく関係がないと考えられている。

イ 誰が発言したかわからないという特性を持つインターネットでは、身体性の欠如とは無関係に匿名性が保証されるため、それが急激に普及し始めた一九九〇年代半ば以降、相手を知らないまま同じ空間を共有する作法が様々に考案された。

ウ 不特定多数に向けて情報発信できるインターネットの特性は、身体性の欠如と匿名性からなっているが、身体性の欠如は表情や身振りなどの非言語的な手がかりの欠如と身体そのものの欠如という二点に分けて理解する必要がある。

エ 都市化が進むなかで広がってきた「ファミリア・ストレンジャー」という考え方は、親密性と匿名性の中間的関係性を説明したものであるが、そうした特徴は身体性の欠如がもたらされたインターネットにも当てはまるものである。

3

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

春高バレー予選の数日前、明鹿高校バレー部二年生の宮下景(僕)は、高校のフェンスを乗り越えようとする真島綾を目撃して驚き、自転車で倒れ右足を痛めた。それを隠して練習試合に臨んだ僕は、足首靭帯を損傷し、レギュラーを奪われてしまう。漫画家志望の真島は、少年誌で新人賞を取った後、漫画を描き上げられなくなっていた。けがをさせた責任を取りたいという真島に、僕はバレー部のポスターを依頼し、交流が始まる。冬休み、大松高校での合宿中に級友の浦井から電話があり、真島からの伝言を告げられた僕は、真島に電話をかけた。

「伝言の意味はわかった?」

システイーナの先が見えそう。試験の最終日、真島は僕の教室に渡したいものがあるからという理由で現れ、僕は部活でいなかったから、その言葉を浦井に託した。

わかんなかった、と正直に答えると、

「そっか、残念。」

と、真島はむしろ嬉しそうに言った。

「渡したいものがある、っていうのも聞いた。」

「そう。宮下くんにお礼がしたくて。(1) お礼っていうか、恩を返したい。」

恩を返したい。どこかで聞いたことがある響きだった。

「……罪を滅ぼしたい、みたいだ。」

あれはまだ十一月だった。体育館の昇降口で告げられた言葉を思い出し、僕は少し笑ってしまう。本当だね、と真島も笑ったのが電話越しにわかった。

「それでお礼って？ 僕、なにかしたっけ。」

「したよ。」

真島は言った。「おかげで、また私描けそう。」

あまりに普通の調子で言うから、すぐには理解が追いつかなかった。意味がわかると今度は、もっと劇的な、ドラムロールとかファンファレとか、そういう演出でもつけて言うべきことじゃないか、と困惑した。

「……本当に？」

「うん。次の作品が描けそう。キャラクターも出来たし、ストーリーも固まった。」

僕は適当な言葉を探す。

「アイデアって、やっぱり、突然生まれるものなんだ？」

「突然じゃないよ。キャラもストーリーも、何度か考えたことのあるアイデア。でも初めて、形になりそうな気がしてる。気がしてるだけじゃ

なくて、これは間違いなく形にできると思ってる。」

(2) ようやくスティーナの先に行ける、と真島は付け加える。

「スティーナの先？」

「『スティーナの聖母』の先に。新人賞を取った作品は、私の最後の作じゃない。」

やっと僕は伝言の意味を理解した。

(注1)にせ
偽バーマン公園で真島が言っていたことだ。あの公園で交わした会話なんて、もう何年も前のことに思えるけど、あのとき真島は『ステイナの聖母』を描いたラファエロの話をした。ラファエロは、『ステイナの聖母』を描いた翌年から多忙になり、絵画は工房で他の画家の手伝いのもと描くようになる。だからもしかしたら、確証はないけど、『ステイナの聖母』は、ラファエロが最後に自分一人の手で描き上げた作品なのかもしれない。

(3)「また、深海に潜っていける。」

冗談めかしたふうには、真島は言った。

陽光がぼんやりと届く海の底で、彼女は机に向かっている。首元で銀色の魚が身を翻し、足元で足の長い蟹が砂地を掘る。真島は夢中でペンを動かして、描き上げられた原稿が一枚、また一枚と、ふわふわ漂いながら浮かんでくる。端正な線で構成された絵。真島は一人、顔も上げずに没頭している。

そんなイメージがふと浮かんで、携帯を握る右手に力がこもった。身体が内側から熱を放つ。

「この前、公園で喋ったとき、感想を伝えてくれたでしょ？」

真島は言った。「心に残ってる台詞があるって。終盤の、幽霊の台詞。」

「うん。」

「私の漫画の、絵以外の部分についての感想、あれが初めてだったから嬉しかった。でも、それだけじゃない。その部分をあとで自分で読み返してみても気がついた。」

心臓が激しく鳴り、拍出される血の勢いで指の先まで震えているように錯覚する。手に汗が滲んで、携帯のケースが湿った。もしかして、と思っていた。

「『この部屋もこの街も、私にとって切っても切り離せないもの。だから、私はどこへも行けない。』」

真島は滔々と読み上げた。それから、照れ笑いが聞こえてくる。

(4)「……自分で自分の描いた台詞を音読するの、めっちゃくちゃ恥ずかしい。」

僕はなにも返せなかった。偶然の一致に身体も脳も固まっていた。電話をかける直前、僕が思い出していたのも、ちょうどその台詞だった。和泉の発した「バレーを離さない」という言葉から、それを連想していた。

「あのとき、宮下くんは、『私はどこへも行けない。』の方に注目してくれてた。」

真島は続ける。「でも、読み返して目が離せなくなったのは、その前の部分。」

「『私にとって切っても切り離せないもの。』」

僕の呟きは、誰もいない階段にぴんと鋭く響いた。

「そう。その部分。私こんなこと書いてたんだ、って読み返して驚いたくらい、それくらい本当ににげない台詞だった。でも、それに私は救われた。救われたって言うとおおげさだけど、なんだか腑に落ちる感じがした。」

遠くの街から届く真島の声は静かで、でも弾んでいた。その声音は、炭酸の底から、ふらふら揺れながら上ってくる小さな泡を思わせる。

「……切っても切り離せない。私にとって漫画はまさにそう。好きとか嫌いとかじゃない。もちろん好きで始めたことだけど、いつの間にかそんな簡単に割り切れるものじゃなくなってる。たしかに、描いていても苦しいことばかりだよ。でも私にとって漫画を描くことは、ほとんど生活の一部だって、そう気づいたら、これからも描いていける気がした。」

息継ぎするように黙ってから、

「自分の書いた台詞でそんなこと思うって、変だけど。」

と、真島はまた笑った。

僕は黙って、携帯を握りしめる。真島にとつての漫画を、僕にとつてのバレーボールに置き換えていた。

切っても切り離せない。好きとか嫌いとかじゃない。生活の一部。

(5) テトリスで凸の形のブロックが空いた部分にちょうどぴったりはまるような感覚だった。列が揃って、溜まっていたブロックが消えていく。

ずっと靄に覆われていた部分が晴れていく。

もしもし、という真島の呼びかけで僕は我に返った。

「うん、聞いている。」

「それでね、そのことに気づかせてくれたのは宮下くんだから、お礼をしたいと思った。それが渡したいもの。」

クリスマスイブだから、という浦井の冗談は振り払った。浦井とかマリオの浮かれた考えに影響されてはいけない。

「なんだろう。」

「バレー部のポスター。」

あ、と僕は声を漏らす。

「二度、作ってって頼まれたものなわけだし、お礼にはなってないかもしれないけど、でも描いた。結構いいの描けたと思う。」

「え、もう出来てるの？」

「試験期間中に描いた。勉強する気まっただくなかったからさ。」

「そっか、そっか。うん、ありがとう。」

「今度学校で見せるよ。楽しみにしてて。」

「わかった。」

僕は頷く。「楽しみにしてる。」

(6) 雨が強まったのか、雨粒が校舎を叩く音がふいに大きく聞こえてくる。いつとき、空き教室にいるチームメイトや他校の選手のことを忘れて、僕と真島だけがこの知らない夜の学校に忍び込んでいるような気分を覚えた。真島はいつかみたいに、一人分の距離をあけて、僕の隣に座っている。

廊下の先から「そろそろ寝るぞ。」という誰かの声が聞こえてきて、現実に戻された。いまは二泊三日の遠征中で、ここは合宿先の大松高校だ。明日も試合がある。

「じゃあ、また学校で。」

真島が電話の向こうから言った。

「うん、じゃあ。」

「次会うのはたぶん、年が明けてからだ。」

「ああそっか、本当だ。」

「良いお年を。」

「じゃあ、良いお年を。」

「とうかその前に。」

真島は、くすりと笑った。「メリークリスマスだ。」

その声は、すぐ隣で発せられたもののように聞こえた。

いつの間にか、電話は切れていて、僕は暗くなった携帯をだらりと投げ出した手に持っていた。頭の中心の方がぼんやりと霞んでいる。その

くせ、心臓は必死に自らの存在を主張するように跳ねている。なにがそうさせているのかは、はっきりしなかった。(7) とりあえず、とりあえずい

まは、はっきりさせないままでもいいと思っただ。

凝り固まった足を揉んでほぐしてから、立ち上がった。どうして僕は、高校でもバレーを続けたのか。どうしてずっとバレーをしているのか。その答えはもうわかる。

でも、一つでいい。なにか一つ、具体的に言葉にできれば。

真つ黒な廊下の窓に僕の姿が反射していた。細かい雨滴で輪郭が滲んでいる。

そのなにかは、きっとコートの中でしか見つからないんだろう。

(坪田侑也『八秒で跳べ』文藝春秋 による)

(注1) 偽バーマン公園Ⅱ真島のアルバイト先の近くにある公園。

(注3) 和泉Ⅱ強豪校の選手。大松高校に合宿に来ている。

(注5) マリオⅡ僕のチームメイト。

(注2) ラファエロⅡ15〜16世紀にイタリアで活躍した画家。

(注4) テトリスⅡブロックを消すパズルゲーム。

問1 本文中に、お礼(1)についていうか、恩を返したい。とあるが、ここでの真島の心情を説明したものとして最も適当なものを、次のアからエま

での中から一つ選べ。

ア 漫画を描く楽しさをもう一度思い出させてくれた僕に、感謝を伝えることで、バレーへの情熱を取り戻してほしい。

イ 漫画を描けないでいる自分に寄り添い、励ましてくれる存在だった僕に、新たな作品を届けることで喜んでほしい。

ウ 自分が漫画に込めた、わかって欲しいと思っていたひそかな意味をくみ取ってくれた僕に、お礼の言葉を伝えたい。

エ 自分にとって漫画を描くとはどういうことか、見つめなおすきっかけをくれた僕に、自分ができることで報いたい。

問2 本文中に、ようやくシスティーナの先に行ける、とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中

から一つ選べ。

ア 新人賞をとった作品が自分にとって最後の作品になるのかと思ひ悩んでいたが、僕との関わりをきっかけにして、再び漫画を描き始め

ることができそうだということ。

イ 新人賞をとれたことが自分にとって最後の成果だったのではないかと思ひ悩んでいたが、時間をかけて構想を練ったおかげで、次の作

品が仕上がりそうだということ。

ウ 新人賞をとったことで漫画に向ける情熱が燃え尽きてしまったのではないかと思いついたが、僕がほめてくれたので、再び漫画を描く自信を取り戻したということ。

エ 新人賞をとれたことがプレッシャーになり思い悩んでいたが、僕の励ましで以前の自分よりも強くなれたので、より強いプレッシャーにも耐えることができるということ。

問3 本文中に、また、深海に潜っていける。とあるが、これはかつて僕が真島と交わした会話を踏まえた表現である。次に示すその会話部分を読み、「また、深海に潜っていける」の説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

「深海にいるような感じがするのは、漫画がすらすら描けてるとき。一番順調なときは、そんな感覚があったの。自分の描いている世界にはどんどん潜っていったって現実世界が遠のいていく、っていうか。ペンを動かしながら、心地いいんだけど、ちょっと息苦しさもあって、でも簡単には浮上できない。浮上したいって思うことすらない。どんどん、深く深くへ潜っていく。そんなふうに、まえば漫画を描いてた、はず。」

真島の声は徐々に弱々しく、頼りないものになっていった。

それでも真島は、僕に話す、というより、自分の内側の部分を言葉として吐き出すように、ぽつぽつと続けた。

「まえば感覚を取り戻したくて、美術準備室にこもることもあった。漫画を描くと辿り着くのが深海なら、準備室は潜水艇みたいなものだったから。」

「もしかしてあの夜、フェンスを乗り越えてたあの夜も。」

「あーそうだね。あの日も準備室にただこもってた。いつも同じ。ストーリーはまとまらないし、絵を描いても、描きたい話、描きたいキャラじゃないって消すだけ。潜っていいこうと思っても、浅いところで留まって、気づいたら浮かび上がってる。毎日毎月、ずっとその繰り返し。」

冬の公園の地面に向かって、真島は淡々と言った。自分のことではなく、まるで他人の噂話をするように僕には聞こえた。

ア 漫画を描くとき感じていた苦しさを乗り越え、これからは自分の思いを正直に表現し、楽しく漫画を描いていけると思っている。
イ 現実を忘れるほどのめり込み、夢中で漫画を描いていた頃と同じように、再びひたむきに漫画に向き合っていると思っている。
ウ すべてを排除し、賞をとることだけを目標にしていた日々を抜け出し、これからは自分らしい漫画を作り上げようと思っている。
エ ただ部屋にこもるのではなく、今後は漫画のストーリーに没入し、再び自分だけの世界を作り上げることができている。

問4 本文中に、僕はなにも返せなかった。とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 和泉が言った「バレエを離さない」という言葉と同じことを、真島が漫画に記していたことに驚くと同時に、スポーツのできない真島から、今の自分にとって大事な言葉が聞けそうに思えて期待しているから。

イ 強豪校の選手である和泉が用いた「バレエを離さない」という言葉と、真島の力強い発言が重なるように思えて驚くと同時に、自分だつて二人に負けてはいられないという思いが少しずつ芽生えてきているから。

ウ 電話をかける直前に思い出していた『私にとって切っても切り離せないもの。』という真島の漫画の台詞を、真島が口にしたことに驚くと同時に、それが今の自分にとって重要な言葉のように感じられて動揺しているから。

エ 自分が思い浮かべていた『私にとって切っても切り離せないもの。』という真島の漫画の台詞を、真島も口にしたことに驚くと同時に、以前自分が見落としていた意味を、改めて真島に指摘されてとまどっているから。

問5 本文中に、(5) テトリスで凸の形のブロックが空いた部分にちょうどぴたりはまるような感覚だった。とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 真島との会話をきっかけに自分の問題の解決策がわかり、人に心を打ち明けることの意義を知ったということ。
イ 真島とのやり取りを通して気持ち軽くなり、彼女が自分にとって大切な存在になったと気づいたということ。
ウ 真島の言葉が自分の状況にも当てはまり、悩んでいたのは自分だけではないとわかって安心したということ。
エ 真島の言葉がこれまで漠然と悩んでいたこととつながり、気持ちの整理がついてすっきりしたということ。

問6 本文中に、(6) 僕と真島だけがこの知らない夜の学校に忍び込んでいるような気分を覚えた。とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 真島の漫画に向き合う姿勢が自分とバレエとの関係に重なり、電話で話しているということを忘れるほど真島の存在を近くに感じているから。

イ 自分がバレーに対して悩んでいたことに真島が気づいていたとわかり、電話を通して互いの気持ちを理解することができると感じているから。

ウ かつて真島が夜の美術準備室に忍び込んでいたことを思い出し、夜の学校で電話をしている自分と真島とは共通点があると思っ
ているから。

エ 自分の忠告がきっかけで真島が漫画に対する情熱を取り戻しつつあると知り、このまま誰にも知られずに電話で話し続けたいと思っ
ているから。

問7

本文中に、とりあえず、とりあえずいまは、はっきりさせないままでもいいと思っただ。とあるが、ここでの僕の説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 自分がなぜバレーを続けているかがもう少しでわかりそうだが、まだ確信は持っていないので、共にコートで戦う中で仲間に示しても
らいたいと思っっている。

イ 自分にとってバレーとは何なのかが感覚としては理解できたが、それを今言葉にするのではなく、実際のプレーに臨むときに実感できれ
ばいいと思っっている。

ウ 自分が本当はバレーに対して熱い思いを持っていることはわかったが、それをはっきりと主張すると、今までの自分のイメージが壊れ
てしまうと思っっている。

エ 自分にとってバレーとは何なのかはわかったが、自分にとって真島がどんな存在なのかはまだわからないので、少しずつ関係を進めてい
きたいと思っっている。

